

天守の妖怪

辻 憲男（文学部教授）

姫路城の天守は、富姫（とみひめ）の御殿だった。年のころ二十七、八、黒髪長く美しく、侍女を侍らせて遊び暮らした。五層の天守から糸を垂れて秋草を釣る。今日も奥州猪苗代（いなわしろ）の亀姫が遊びに来て、喜び帰る手みやげに、城主の鷹狩りの白タカを取ってやった。やがて鷹匠の若侍・図書之助（ずしょのすけ）がひとり、恐ろしくてだれも近寄らない天守めがけて登って来る。一度姫の姿を見た者は生きては帰れない。ところが富姫はこの美丈夫に心を奪われた。ひとまずカブトを与えて帰したが、それがかえってあだになり、図書之助をかくまうはめになった。追っ手が天守に迫り、二人はあわれ両眼を突かれ、もはやこれまで、せめてひと目見納めに、「ものをおっしゃるほのかな口もと」「まつ毛の一すじ」なりとも…。と、そこへ現れた一老人、「誰かの櫛に牡丹も刻めば、この獅子頭も彫った」名匠が、美しい二人の眼を開けて救った（泉鏡花『天守物語』）。

着想は獅子頭の伝説から。それが鏡花得意の妖艶な女怪の悲恋の芝居になった。富姫は元は武家の奥方で、今の正体は怒れば嵐を呼ぶ龍神。前段の怪奇はビアズリー描く『サロメ』を思わせ、後半のドタバタは大正期の通俗趣味ながら、役者を得れば十分に面白からう。

ところで、こういう魔性に出会うと、ひょいと“われらは人間らしく生きているか？”なんて問う俗物がいるものだ。あいや、ゆめゆめ“妖怪のほうが人間らしいかも”などと幻惑されませぬように！



西北方の男山から。
天守には今もオサカベ姫の伝説がある。